

佐伯南郡八十八ヶ所

巡礼の感想と仏像

宮下 良明

(会員・佐伯市古江区)

史談会の行事として研修を兼ねた本題八十八ヶ所巡りが取り上げられ、去る平成十三年(二〇〇一)三月八日、上浦町夏井浦最終札所^{ふたしよ}地藏庵より逆巡番に始まり、早くも三年目を迎える。一番札所養賢寺まで余す霊場は十数ヶ所となった。

信心信仰は人間社会の心の糧^{かて}、先人が辛苦を尽くして開山し、巡礼参拝者が祈願を捧げてきた幾年の今日。今、回史談会において右の行事を実行に移した意義は大きい。巡回を重ねる都度、盛会になるのも当然の成り行きと考えられる。

それでは初めに、右八十八ヶ所創始の経緯^{いきさつ}を次の記念

碑によって曰く^{いわ}の粗筋^{あらま}を知る事と思う。

此の写真の碑は

佐伯駅裏通り二番

札所宝寿院下道脇

に立ち、国道より

鉄道をはさんで遠

望される、高さ約

六^{ろく}の堂々たる御

影石の塔にその碑文が刻まれている。

正面上部に大日如来を示す梵字と^{市海}八十八ヶ霊場開創

記念碑、右側開創者佐藤一斎居士、左側高野山本覚精舎

河内? 謹書と見え、達筆という外はない。

右横碑面「南海佐伯八十八ヶ所霊場之開祖佐藤一斎は直入郡玉来町(現竹田市)之人也と佐藤鶴谷撰文」は記

している。佐藤一斎なる人物の出自は知る事は出来ないが中心的役割を果たした人には間違いない。

左側面は賛同者氏名、さらに台座には米水津村渡辺庄七を筆頭に多くの氏名が三方に見え、開山より五年後の建立になる。

八十八霊場開山は大正六年(一九一七)十一月で、此



記念碑写真

の時代は日豊線が佐伯駅まで開通（大正五年十月）した歴史上に残る時代で、大正九年十一月には、さらに直川村神ノ原駅まで達している。つまり、時代的には佐伯町が急速に発展を辿る一つの節目に当たるといえる。

開山の理由については、本四国霊場は海を隔てた四国全域に点在し、余りにも難路と日時を要するため、佐伯南郡一円、更に竹田方面まで宗派を越えた信者と佐藤一斎が開創者になり、佐伯南郡霊場と巡路を開いたものと思われ、後世に残し、称えた碑が上述のものと考えられる。

佐藤鶴谷著『佐伯霊場道知留辺』序文に佐伯城下に起り東上浦にて終わる。八十八区は一町十有村、順路の里程は約五十六里とある。此の巡路には長い年月遍路達の汗と足跡が染み込んでいることに間違いない。

さて、創設された霊場は何処も地域伝来の信仰聖地に設定され、本堂・庵坊の須弥壇に安置される主尊と多くの尊蔵は、永い年月、村人や巡礼者の祈りと願望が込められている姿には自ずから合掌せざるを禁じ得ない。

更に、祈り読経と共に用いる大小の鐘、木魚等仏法の必需品は何れも古く信者の垢の染み付きに篤い信心を見出した事は云うまでも無い。

霊場周辺の景観は、六地藏尊・庚申塔・大乘妙典塔・五輪塔・其の他の石仏から、地域の人々の豊かな人情と和の大切さを改めて感じ取った事を付け加えて、次の像容の部に移りたい。

一、如来之部

ほとけは仏界に在つて衆生を救う力を有し、絶対者として云われる。八十八ヶ所に安置される諸々の尊像はすでに大半を拝観してきた。大別して如来・菩薩・明王・天部に別れている。容姿・持物・印相・様式等は迄観察してきた仏像と仏典との共通点を追想してみる事も一つの勉強になると思ふので、次に尊名を挙げ略述してみようと思ふ。

(イ) 大日如来ニ種子シ（種子とは主尊を示す梵字）はニ（大日）

密教を説いた絶対的中心の本尊で宇宙を神格化したほとけ、空海が我が国に伝える。他の如来と違い宝冠を戴き、髪を垂れ装身具を付けた菩薩の姿をしている。印相は智拳印（人差指を握る）。

(ロ) 阿弥陀如来ニ種子シはニ（弥陀）

納衣ノウエを纏まとう丈で装身具を付けない。光明は無量であり十方の国土を照らす。

西方浄土にあつて大悲による永遠の救いをするとう云う。功德により極楽往生ができると思ふ。普通弥陀常印を結ぶ観音・勢せい至の両菩薩を脇侍とする三尊様式。



阿弥陀如来(現代)

檜野区永福庵の三尊仏は古仏として名が高い。

(八) 薬師如来ニ種子はハク(薬師)

東方に当たる極楽浄土の教主、万病を癒し寿命を延ばす薬を司るほとけ。左手に常に薬壺を載せ日光・月光を脇侍とし十二神将に守られているのが普通の姿。本匠村長楽寺の三尊仏は代表作。



薬師如来

(二) 釈迦如来

紀元前六世紀の頃、中印度カピラ城主の王子として生

まれると同時に、天井天下唯我独尊と叫んだと云われ、四月八日は甘茶祭で一大仏教行事。慈悲と智慧の二篤を備へ普賢、文殊両菩薩を従えた三尊仏の様式。種子はハク(釈迦)その他の如来に阿闍・宝生・不空成就の如来が有るが、層塔・宝篋印塔・五輪塔等四方仏に種子の梵字が刻まれる例が多い。

一、菩薩之部

菩薩とは悟りを求める人、つまり仏陀となる以前の修行者、その像形の特長は頭髮を美しく結い上げ、頭には宝冠を戴く、全身を装身具で飾り、慈愛に満ちた面相、但し地藏菩薩には宝冠はない。

(イ) 聖観音菩薩ニ種子はハク(観音)

衆生の願い事を聞くから観世音といい、何事も恐れぬ信念とおおし信仰を与える。左手に慈愛のしるし蓮華を持つ



観音菩薩(現代)

弥陀三尊の左脇侍。

(口) 地藏菩薩 種子は **な** (地藏)

地藏は閻魔王の本地仏、賽の河原で幼児を救うと説く。常に六道をめぐって衆生を救い極楽に行けるとされ、火災防・盗難除・病氣平癒など庶民の願いをかなえてくれる。地藏講や地藏盆の年中行事の一つになった。像形は左手錫杖・左手宝珠の姿が多い。

(ハ) 千手観世音菩薩 種子は **な** (本地千手)

千手千眼自在菩薩といい、千の慈眼、千の慈手で衆生を斉度するという。一手で二十五有界の衆生を救うので四十手で千となる。普通、頭上に十一面を置き、安産を願う菩薩。龍護寺、常楽寺の本尊は鎌倉期の作と云われている。

(ニ) 十一面観世音菩薩

頭上に本面と合わせて十一面になる仏を頂く。右手に念珠を持ち、左手に蓮華を挿した水瓶を持つ。その功德は諸病を逃れ財宝を得る、長生をすると説く。種子は **な** (本地十一面) の梵字。

(ホ) 勢至菩薩 種子は **な** (勢至)

智慧門を司り、仏智の光明は無限。この菩薩は阿弥陀

如来の右脇侍で、左の観音と共に弥陀三尊を構成する。

(ヘ) 文殊、普賢両菩薩 種子は **な** (文殊) **な** (普賢)

共に釈迦如来の脇侍、智慧門と慈悲門を司る。文殊は獅子、普賢は象に乗る例が多い。

(ト) 日光、月光両菩薩 種子は **な** (日光) **な** (月光)

共に薬師如来の脇侍として知られる(長楽寺)。日光は左手に日輪、右手に紅白の蓮華を取る例が多い。其の外菩薩像は多いが、都合上省略する。

一、明王之部

教化のむつかしい衆生を折伏して救済する。その為、ほとんどの明王が忿怒相に作られている。例外として孔雀明王は慈悲相である。

(イ) 不動明王 種子は **な** (不動)

大日如来の変身とされ明王部の代表的な存在。種々祈願をかなえて呉れ、日本の滝に広く祭ら



不動明王 (文久2年)

れ、衿襦羅、制叱迦二童子を従えるのが通例。火焰光背と右手に劍、左手に繩索を持つ忿怒相。

(口) 大威徳明王ニ種子は **𑖀𑖄𑖔𑖃** (牛御子) 本地大威徳

文殊菩薩の化身とも眷属ともする説がある。水牛に乗るのが通例である。

(ハ) 愛染明王ニ種子は **𑖀𑖄𑖔𑖃** (本地愛染)

深い愛情を意味する処から恋愛祈願の対象として信仰、古くは弓矢を携えている処から武運の神とされていた。像容は三眼六臂頭に獅子冠を戴く。その他、孔雀明王等があるが省略。

一、天部

天部とは天上界に住むと信じられる仏教の守護神をいう。天部を祭る霊場は

多い。下図は石造仏。



毘沙門天 (江戸後期か)

(イ) 毘沙門天ニ種子は **𑖀𑖄𑖔𑖃** (毘沙門天)

常に道を守って説法を聞くところから、多聞天とも呼

ばれる。富の神であり護法神の一つで四天王や十二天の北方に配される。上杉謙信の「毘」の旗指物も毘沙門天信仰に由来する。

像容は右手に宝棒、左手に宝塔を捧げる。龍護寺、常楽寺に祭られている。

(口) 弁才天ニ種子は **𑖀𑖄𑖔𑖃** (本地弁才天)

美音天、功德天とも称し、略して弁天と呼ばれる。音楽や智慧の神、吉祥天と共に絶世の美人である。像容は天女形で琵琶を手にする。

(ハ) 大黒天ニ種子は **𑖀𑖄𑖔𑖃** (大黒天)

中国では古くから寺院の守護神とされ、豊饒を司る神であった。日本では大國主尊との習合もみられ、恵比須と共に福の神の代表的存在となった。その像容は左肩に大きな袋を背負い、右手に打出の小槌を持つ。

其の外、天部には梵天・仁王・帝釈天・十二神将・布袋・摩利支等、多数の諸天が有るが、省略する。

以上、仏の階級と功德、更に容姿と様式等少述してみた。ほとけの世界は無限であり、日本民族が何千年栄えてきた背景には仏界の力が大きく支配していることを改

めて痛感している。少冊の文献にたよって感想を述べてみたが、初歩の知識で説明するには余りにも仏の世界は難しい。いずれにしても各札所を会員と共に巡拝し、数々の仏像に接してきた。得た知識はせめての収穫であったと思う。また八十八ヶ所の所在地と順路を振り返り、佐伯南郡の広大さに驚き入る。

さらに遍路達が巡礼によって得る御利益は、本四国参拝に準ずるもので、心の安楽に大きな役割を果たしてきた事も疑いの無い事実であろう。

最後に、会員を迎えて下さった土地の人たちによる御茶、接待の温かなもてなしに接しました。紙上を借りて心から御礼申し上げたいと共に、又、新たな人々との交流が芽生えた事もつけ加えておきたい。佐伯南郡八十八ヶ所の未来永劫栄えん事を、合掌。

【参考、引用文献】

日本石事典

梵字手帖

密教辞典

民間信仰辞典

佐伯霊場道知るべ

石塔の民俗

地名のルーツ

◆ 弥五郎 (本匠村大字山部)

弥五郎という人の屋敷か、所有地でもあったように考えられますが、そうではないでしょう。

かつて地主が自分の名をつけた田地を持ち、その名が地名になっているが、弥五郎という名前は荘園制時代の名主の名前らしくなく、時代が下がって感じられます。おそらくは、北九州地方に残っている、巨人伝説の主人公弥五郎と考えるのが適切でしょう。

(『地名覚書』染矢多喜男)

◆ 高札場・札の辻・札場・札前

藩はその支配を徹底させるために高札を建てました。いろいろの規定を村民に衆知させるもので、檜の横板に記して人目を引き易い交通の多い場所を選んで建てました。その場所は高札場とか札の辻などと呼ばれました。

佐伯地方に残っている地名をあげると、次のようである。大字大坂本字札場・大字江良字高札所(以上弥生町)、大字佐伯字札場・大字上岡字札場・大字護江字古高札(以上佐伯市)、大字床木字札前(弥生町)、大字三股字札ノ元(本匠村)などがある。

(『地名覚書』染矢多喜男)